T-4　気仙沼市唐桑宿地区　　2012 年 2 月 17 日（金）

報告者名　相澤　卓郎　　被調査者生年　① 生年未確認（男）、② 生年未確認（男）
調査者名　植田今日子　　被調査者属性　① 小型漁船組合長、② 小型漁船組合事務会計
補助調査者　相澤　卓郎

オヨロコビについて

総会の後に行われた新年会の最中に、「オヨロコビ」が歌われた。オヨロコビとは婚礼や浜まつりなどの船事など、祝いの席などで歌われるもので、それぞれに見合った歌が歌われる。今回歌われたのは「千里ノ浜」という曲で、大漁祈願や浜まつりの時に歌われる。他に、婚礼時に歌われるものや長寿を祝う「養老」、全般にあう曲として「春栄」などがある。浦まつり（浜まつり）時にも歌われることから、17 の港それぞれに、オヨロコビを歌う人がいる。だが、近年では後を継ぐ人がいなくなってきているという。

唐桑の漁業形態

昔は、男性にとって船に乗って漁をするというのは一種のステータスだった。陸で仕事をするよりも漁の方が収入が圧倒的に多いからである。そのため、病気などで海に出られない人を除いて、男性は全員漁師となった。一方で女性は船に乗ることさえ許されてはいなかった。船の神様は女性であるとされ、女性が船に乗ると神様が嫉妬するからだそうだ。昔は、安全祈願のために女性の陰毛を船に入れ、それを守り神ともしていたという。

唐桑ではヨドやシラス、イサダ、またメロウドといった魚が獲れる。また、サケ漁も行っている。サケは宮城県内では網で獲っても良いということになっているということだった。

サケ漁は 9 月 25 日～11 月 25 日まで行われ、イサダ漁は 3 月～だいたい 5 月ごろまで、獲れなくなり次第終了だという。

沖出しについて

地震が発生すると、海ではその揺れにより波が起こり、津波として陸地へと押し寄せてくる。津波は進行中に、海底で浅瀬から深瀬へと切り替わる段差に衝突すると、海水が持ちあげられるようになり、津波の威力が増大する。津波が威力を増す前に、沖へと船を避難させようとするのが沖出しである。船を一隻作るのには 1 億以上もの金額がかかり、また、時間もかかる。そのため、沖出しは漁師にとって船を守るための唯一の手段であり、非常に重要な意味合いをもつ。

今回の震災時、唐桑の船は浪板などにあった船と比べて多くが沖出しにより津波被害を逃れている。唐桑の船が多く助かったのには、沖までの距離の違いに理由があるという。浪板から沖へ向かうには約 40 分、それに対し、唐桑からは約 20 分で沖に着く。この差が、唐桑で多く船が残った理由だという。今回の震災では、桐丸、峰丸、丸功丸、海清丸、浩進丸、海栄丸の 6 隻が、

小型漁業船部会から脱退することになった。

ウラバライ（浦払い）について

唐桑で海難事故が最も多く起こるのは、カツオやサンマの漁船が唐桑にやってくる時なのだという。唐桑の漁師が海上で遭難や事故にあうと、唐桑全体で漁が一時的に中断され、全員で遭難者を捜さなければならない。「困った時はお互いさま」だからであるという。漁は、遭難者が見つかれば再開されるが、もし遭難者が亡くなってしまったら、浦払いが行われることになる。浦払いとは、漁師にとって一種のけじめなのだという。

震災後の復興に向けて

唐桑では沖出しにより多数の船が残ったが、そのことが震災後の漁業の復興にも影響しているという。船が多数流された地域では、船を共同で使うなどして新たに漁業形態を変えていこうとする動きがあるが、唐桑では残った船の方が多く、そのために 17 の港それぞれで「自分たちの力で何とか復興していかなければ」というように考えるようになっていったのだという。港の瓦礫撤去作業も自分たちで行い、県が撤去作業を始めた頃にはすでに終えていたそうである。

写真　新年会で唄われるオヨロコビ